

沖縄っうしん vol.1

民主主義と 自治権確立の展望を開く年に

わくた ひろし
湧田 廣

沖縄住民と自治研究会（世話人事務局）



沖縄県公式ホームページより — 翁長知事臨時記者会見 普天間飛行場代替施設建設事業に係る公有水面埋立承認取り消し(10月13日)

多摩自治研の皆さま、新年おめでとうございます。

今年、辺野古新基地建設問題をめぐって、日米両政府に対抗する翁長沖縄県知事と県民一丸となった重大な闘いの節目となり、憲法と地方自治の真価が問われる年になりそうです。

昨年、安倍政権は安保法制（戦争法）を国民の反対の声を押し切って強行採決をしました。

ここ沖縄では、圧倒的な民意に支えられた翁長知事が二〇一五年一〇月一三日辺野古埋め立て承認の取り消しを行いました。国はこれに対して、翌四日その権力をむき出しにして、防衛局が行政不服審査法を用いて私人になりすまし不服申し立てを行い、同じ国（国交相）が「県知事の埋め立て承認の取り消し」の効力を停止する決定を行ったのです。埋め立て本体工事はその翌々日から、県の工事中断の要請をも無視して強行再開されました。

さらに政府は、一月一七日県知事の権限を奪うための「承認取り消し」を無効とするための代執行訴訟に踏み

切りました。

沖縄県翁長知事は近く、国交相が行った知事の承認取り消しを執行停止した行為を違法として、その取り消しを求める抗告訴訟を提起することになっています。

この国と県の法廷闘争は、憲法と地方自治を正面から争うことになり、戦後七〇年にわたって、米軍基地による県民の犠牲と苦悩、差別的な扱いに抗し、「新基地建設ノー」という民主主義の体現求める沖縄県民の誇りと尊厳をかけた闘いの重要な局面になっています。

翁長知事は一二月二日代執行訴訟の第一回口頭弁論での意見陳述を行い「歴史的にも現在においても沖縄県民は自由・平等・人権・自己決定権をないがしろにされて」きたことが「魂の飢餓感」となっており、「日本には本当に地方自治や民主主義は存在するのでしょうか、国民の皆さますべてに問いかけてい」と力強くよびかけ「沖縄、そして日本の未来を切り拓く判断を」求めたのです。翁長知事を支えていこ

うと高裁那覇支部前公園には二千人の県民が結集しました。

一二月一〇日翁長知事就任一年を迎えました。

「沖縄現代史の分水嶺にたっていると、強く感じた一年だった。」（沖縄タイムス社説）

どの思いは多くの県民が感じ取っていることと思います。

安倍政権による国民を無視した安保法制（戦争法）の強行採決に立憲主義と民主主義の危機感を感じ、連日国会を包囲したかつてない人々の怒りと闘い。

沖縄の民意をないがしろにして、差別的な新基地建設を強権的に進める安倍政権の横暴、法的な根拠を不適法に使いまわし国のご都合主義によって、憲法や地方自治を踏みにじる法治国家があり得るのでしょうか。

新年はじめから、安倍政権と翁長県知事・県民の攻防は続くことになりました。

県民はこれまでの島ぐるみの闘いを

さらに発展させるため、さる一二月二四日には「辺野古新基地を造らせないオール沖縄会議」を発足しました。

設立趣意書では、「建白書の精神を基軸に、翁長知事を支え、県民を鼓舞し辺野古現地の闘いを大きな輪で包んでいく。」そして県の法廷闘争の県民あがての支援体制の構築、全国の理解と支援、国際的な理解拡大などの活動を強化、宜野湾市長選挙、県議選挙、参議員選挙の課題で、選挙勝利に向け連携を図っていく。県民の英知を結集しよう！とよびかけています。

島ぐるみ、沖縄県民総ぐるみ、

沖縄の未来は、沖縄が拓く。

子や孫のために

誇りと尊厳を守りぬく。

この島の未来を拓くため

うまんちゅの英知を結集し

翁長知事を支えていこう。

（大会よびかけより）



◆財政研究会レポート◆ 第26回学習会

地方創生プロローグ 奥多摩町

報告者：多摩住民自治研究所事務局 財政研究会
おおわだ いっこう
大和田 一紘



報告をお願いした奥多摩町議員の師岡さんが選挙直後で日程が合わなかったため、ピンチヒッターとして財政研代表の大和田さんが「奥多摩町の概況」などを語りました。なお、本番の師岡さんの報告は、年明け二月六日に予定しています。

奥多摩町は東京都の面積の一〇分の一ほどとなる二二・五・六平方キロメートルの広大な面積を有し、人口は平成二二年国勢調査で六〇四五人、住基人口では平成二六年一月一日が五六五八人、平成二七年一月一日が五五一一人です。

ピーク時の人口は昭和三〇年に一五五九四人でしたので、今では三分の一近くに減少し過疎地域の指定を受け、いわゆる「消滅可能性都市」にも数えられています。

年齢別人口の総人口に占める割合を見ると、平成二六年一月一日は「〇歳〜一四歳の年少人口が六・三三%で、多摩地域の平均一二・八三%の半分です。「一五歳〜六四歳の生産年齢人口」は四八・八二%で、多摩地域平均は六四・五六%です。そして「六五歳以上の老年人口」は四四・八五%で、多摩地域平均二二・六一%の二倍になっています。

奥多摩町の昭和三五年から平成二二年に

かけての「〇歳〜一四歳」人口の減少率は八八・九%にもなり、平成二六年の年間出生数は一五人でした（死亡は一九五人）。

こうした年齢別人口構成の歪みは、若い人が住みにくい、流出しやすい環境を示していると思われまます。

奥多摩町では一九七〇年代（昭和四五年）からほぼ一〇年ごとに三回ほど過疎振興計画を策定してきましたが、少子高齢化の波をまともに受け、若者の流出も止まりませんでした。

このことに関係して、大和田さんは群馬県川場村がヒントになるかもしれないと例示しました。

群馬県川場村は面積八五・三平方キロメートルで約八八%を山林が占める人口三五七人（平成二六年一月一日）の村ですが、一九七一年（昭和四六）に過疎指定を受けましたが、九五五年（平成七年）以降人口減少が緩やかになり、二〇〇〇年（平成一二）には過疎指定を解除されました。その経過と取り組みを、都市と山村がマッチングした例として紹介されました。

人々が生きてゆくために必要な条件として、子育て・仕事・医療等がありますが、

川場村は東京の世田谷区と単なる姉妹都市を超えた「縁組協定」を締結し、区民と村民の対等の証しとして「(株)世田谷川場ふるさと公社」を設立し、協定締結から約三〇年間様々な取り組みを重ねてきました。同公社の職員は平成二七年四月現在三四名で、ほぼ村内から雇用となっている。相互交流事業は農産物の案内にも拡大し、今では世田谷区民にとって川場村は小学五年生になったら必ず林間学校に行く「第二のふるさと」に近い存在になりつつある…といった趣旨の報告でした。(日経グローカルN〇二七六 二〇一五年九月二一日号に詳細記事)しかし、大和田さんはまた従来の過疎振興策では語れない奥多摩町の特殊性にも言及しました。

それは東京都の水問題を解決するためにある東京都の水源林・小河内ダムの存在です。

多摩川の上流の水資源については、古くは江戸時代から保護されてきました。奥多摩のうっそうとした森林地帯が東京の水を支えてきたのです。東京府・東京市は一九〇一年から水道源地地の荒廃を憂えて、山梨県下の森林を含め、奥多摩の森林を譲り受け、積極的な水源かん養林の経営に着手しました。

こうした長い経過から、奥多摩町は水問題を解決するという現在の東京都の大きな施策の下に従属して、奥多摩町としての自主体性・主体性を十分に発揮できずに今日まで来たのではないかと指摘しました。奥多摩町の財政を見ると、平成二五年類似団体カードでは、過疎の町には奇異に感じるほどの大きな歳入規模と東京都支出金を持つっており、豊かな財政の実態がある、と言います。

歳入規模は住民一人当たり約一〇九万円で、九〇団体ほどある全国の類似団体平均の約七〇万円と比べて三割増し。その中身を見ると都道府県支出金が約四九・九万円で全国類団の約五・五万円の約九倍となっている。これは、おそらく東京都の「水源かん養林」を抱えている結果だろう、と言います。

歳出で見ると一人当たり物件費が約二五万円とてつもなく大きく、人件費の約一六・一万円さえ超えています。一方、類団平均の物件費は約九・五万円ですので、こちらは二倍強。委託料を中心とする奥多摩町の物件費の中身を検証する必要があるだろう、とも言いました。また奥多摩町民の一人当たり積立金も約五八・五万円で、類団は約三四・七万円。

他方、地方債現在高は約四五・八万円で、類団は約六三・六万円。積立は多く、借金は少ない。

こうした点から、奥多摩町は財政規模が大きく豊かなのに、地方創生につながる施策の成果が上がっていない。過疎化が止まらず、若者が逃げてしまっている。

財政の大きさが東京都全体の水問題を解決する施策によるのであれば、それは都全体に奉仕していると言える。奥多摩町民には役立っていない。そうだとすれば、奥多摩町がどのように自主性・主体性を回復して、地方創生を遂げていくのか。それが課題だと述べられました。

その後、全国でまとまりつつある地方創生の計画づくりで、出生率の目標を競い合う「産めよ増やせよ」が共通した目標設定になっていた。産む前にまず結婚が必要と、男女の出会いの場の創出を…とかが議論されている、といった実態などが話し合われました。

次回は、奥多摩町の師岡伸公さんを迎え、二〇一六年二月六日(土)一四時に開催します。

(伊藤栄一)

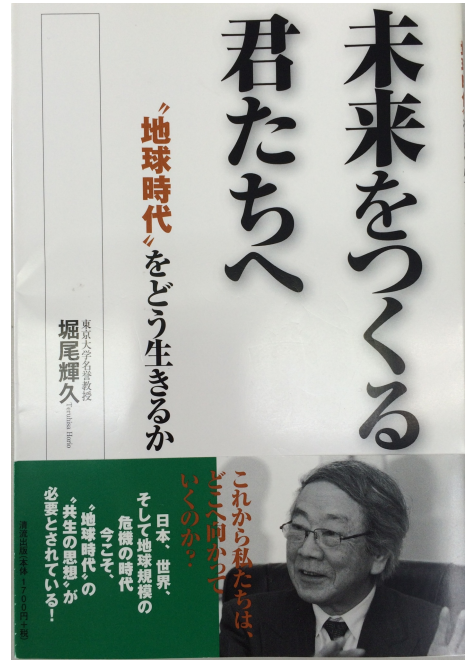
書籍の紹介



“今の生き方”

堀尾輝久氏による本書は、この現代を生きている我々に対しての問題提起であり、認識のための新たな視点であり、共生という生き方の紹介です。

副題にも使われている地球時代という言葉は、歴史的な視点で見た時代区分の一つですが、この背景にあるのは一貫した歴史に対する敬意と現状へのシビアな認識、そして未来



『未来をつくる君達へ
—“地球時代”を
どう生きるか—』

堀尾輝久・著
清流出版、2011年
価格（本体1,700円+税）

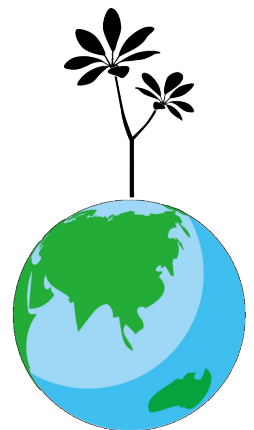
への責任です。本文中では「地球上に存在するすべてのものが一つの絆によつて結ばれている」という感覚更に認識が、地球規模で広がり、共有されていく時代」と定義しています。この“すべて”という言葉は時間や空間を超越します。つまり視点を過去に飛ばし、戦争や貧困、環境問題による死者を心に刻み、その上で共に生きるといふ感覚であり、現代に存在する宗教的文化的多様性と、その違いの許容、そして重要となるのが、未来と一つになることです。今

を生きる私達の行動は、様々な影響を未来に及ぼします。死者と共に生き、隣人との違いを受け入れる我々は、自分の子孫に、あるいは地球の外から見た惑星という一つのコミュニティに、どのような物を残せるのでしょうか。

そんな地球時代を英語の

「global age」あるいは、フランス語の「l'ère planétaire」（レール・プラネテール）と表現し、捉えています。私はここにギリシャ神話の黄金時代「golden age」を感じました。世界が調和と平和に満ち人は安らかに生きていたこの時代は、理想郷の神話の一つではありますが、同時に再び人類が迎えることを望んでいる、実現したい“時代”であると思えます。

（松川 遥）



生活者として、専門家として

ドイツで二〇年以上暮らす歴史研究者でもあり、フランクフルト日本人国際学校事務局長でもある著者が、ドイツの過去を「記憶する」心に刻む「取り組みについて書いたのがこの本です（肩書は本書による）」。

第三帝国の時代とホロコーストの記憶、戦後の東西ドイツの歴史認識のギャップ、ポーランドやフランスとの共通歴史教育教材の作成、大量かつ多様な移民とドイツ社会がどの

ような記憶を共有していくのか、といった、ドイツにおける「記憶の文化」を持つ幅広さを描くという、ある種「欲張りな本」という気もします。

もつとも、平易で丁寧な文章で、「記憶」を入り口にしたドイツ社会入門のように読むこともできます。

私は、二〇一一年にドイツで兵役及び兵役拒否としての「社会奉仕」(Zivildienst) がなくなったことなど知らず、ビックリしました。

日本でドイツの「記憶」といえば、

歴史認識や教育を日本と比較して、「ドイツはこんなに頑張っている」という話が多く、それはそれで必要ですが、ドイツ社会における「記憶」をめぐる葛藤や模索を、歴史研究者でありドイツに生きる生活者という視点から描いているのがこの本の特徴です。

それゆえ、連邦国家であるドイツでは、教育の権限が州にあり、あるいは学校で授業を行う教員が教科書を選ぶこと、地域の過去と結びつけて歴史を教えることの必要性など、地方自治が根付いている現地の様子も、自然と伝わってきます。歴史、移民、教育：いろんな角度からドイツを考えるきっかけになるのではないかと思います。

地方の小都市、ビーベラッハ市で、井上ひさし『父と暮せば』の朗読劇から、原発を含んだ核の問題を人類全体の記憶として捉えようとする話など、考えるべきことが詰まっています。

(神子島 健)



『忘却に抵抗するドイツ』

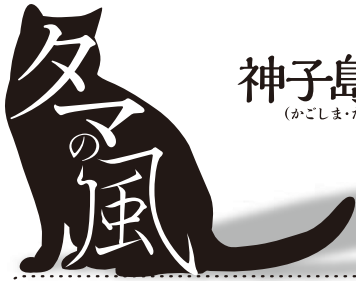
— 歴史教科書から「記憶の文化」へ —

岡 裕人・著

大月書店、2012年

価格 (本体1,800円+税)

吾輩の理由



神子島 健

(かごしま・たけし)

vol. 31

九

月初旬、吾輩とお伴の坊主頭は、宮城県の南三陸町を訪れたにや。あいにく霧がかかっていて、雨も降ったりやんだり。景色もよく見えニヤいので、坊主頭は歌津半島の沿岸部の高台にある、二年ほど前にオープンしたカフェへ向かったにや。

車を止めてドアを開け、「タマも行くか？」と声をかけてきたが、「にゃ〜」と言って吾輩は自分で散歩に行く意思を示した。「いいか、

夕方までにはここに戻れよ」と言う坊主頭を放つて置いて、以前も来たことのあるこの辺りを散策してみることにした。

だが、しばらく歩いていると少しポツポツ降ってきたにや。しかたニヤいから坊主頭の行ったカフェのところに戻って、その軒下で雨宿りをする。

五分位した頃、ネコの気配を感じた。同じ建物の別の陰にいるのだろう、ここからは見えニヤいが、だいぶ近いらしい。「みゃ〜」と声をかけてみる。「ごろにゃーご」と返ってくる。

聞き覚えのある声に、吾輩は思わず声の方向に向かった。「アキちゃん！」

果たして、第17回、18回(二〇一四年一月号、二月号)に登場した、この地域に暮らすネコのアキちゃんであった。ところがアキちゃん、吾輩を見て「はあ、どなたさんでしたかな？」と、とぼけたことを言ってくる。「あー、いや、昨年も、一昨年もお会いしました、タマと申します」「ほー、オラにそんな知り合いいたんだべかな」。明らかに口調がわざとらしいにや。何を狙って

言っているのだにや…？

「先だってはアキちゃんとはとても仲良く語らわせたいただいたのですが」と下手に出てみる。「ほー、アキちゃん」とは、レディに向かつて馴れ馴れしいべ」と、少し怒った顔で言っている。確かに一年を経て、あどけなさの残っていたアキちゃんは、かなり大人っぽくなっていった。

「えーと、これはアキさん、失礼いたしました。しばらく見ないうちにさらに素敵になりました」とかしくまってみる。「オラ、一年も放つとかれたから、タマさんのことなんかすっかり忘れちまってたべ」「いやー、ネコがそうそう東京からここまで来れませんでした…見た目はだいぶ大人になったが、中身はまだ子どもみたいだにや、どうしたもんか、この娘は。すると突然、「アハハ！ まったく、タマさんも相変わらずネコがいいな(人がいいな)。こんな小娘の言うことにかしくまっちゃって、まったく「アキちゃん」でいいよ。また会えてうれいべ」と、軽いスキンシップで挨拶してきたにや、なんだなんだ。

そんなこんなで積もる話を色々始める。「この一年でこの辺の復

興はどうだかにや？」「そうだなー。高台への住宅の移転は少しずつ進み始めてるってとこだべ」「まあ、四年半でこの程度か、と思わずにいられニヤいけどねえ…」その辺の難しいところはタマさんのほうが詳しいべ」「うむー」

「遠くから見てる方がよく見えることもあるべ。タマさん、こっちに来てから素直に思ったことを聞かせてよ」「うん、二〇一一年の夏に被災地の沿岸部に入ったときは、ガレキとヘドロ臭さが目立ったよね」「あれ、震災の年に来たのか？」「あ、いや、ここには来てニヤいけどね」「なんだ、そうか」

「二〇一三年に志津川(南三陸町の中心地)を歩いた時は、ところによつて地盤沈下のせいで水浸しのところが目立っていて、驚いたにや」「あー、今盛り土をしている辺り？」「そうだにや。昨年、今年と、かつての市街地で津波でやられたところの多くは、盛り土の最中で、その規模の巨大さと、工事用の排水のホースが目立つたにや」

「ふーん、そうか。タマさん色々見てるからなあ。オラみたいにくこに居るだけだと、見えないことだ



南三陸町の防災対策庁舎跡と、その周辺で進む盛り土の様子。
2015年9月2日



アキちゃんは写真に取られることをとても嫌うので、別のネコでございます。

「あ、すると『あまちゃん』(二〇一三年のNHKの朝ドラ)の主人公のアキちゃんが、東京と北三陸架空の都市。岩手県北部という設定)を行き来する中で、北三陸のよさを発見して、地元の人たちに伝えていく構図とは違うにゃ。北(三陸)と南(三陸)だけに逆だにゃ」

「そうか。じゃあ、もしかするとタマさんは色々な所を見た上で、オラに、『ここ(南三陸)が一番いいところだ』と教えてくれる存在なんだな」そんなもんかにゃ」

「違うのか?」いや、ヨソモノだから、中にいる立場から見えニヤい地域のよさに気づくことはよくあることだにゃ」

「このいいところって何だべ」

「そりゃ、東京じゃ絶対に味わえない新鮮な魚介類があるにゃ」

「タマさん案外ベタだな」……まあ、だって、吾々ネコにとつては大事だにゃ」

「それから?」その魚介類を支える、自然環境の豊かさ。やつぱり三陸の自然は荘厳なものがあるにゃ」

「ほかに?」こつちに来た人を迎えてくれる地元の人のかさ、とか」

「そうか。タマさんが何度もここに来るのはそうした理由が

あるわけだな。やつぱりここはいいところだべ」と誇らしげに言う。「そうだねー、あとは「あとは? 何だべ?」

アキちゃんとのやりとりをしながら、『あまちゃん』の中で「ここが一番いいところだ」という話が出てきた場面を考えていた。一つは、主人公の祖父で、遠洋漁業の漁師、忠兵衛さん(蟹江敬三)が、地元から出たことのない妻(主人公の祖母)の夏(宮本信子)に、世界中を回った上でこのことばを伝える。

もう一つは、その話を聞いたアキ(能年玲奈)、東京出身の彼女が、親友で、行ったことのない東京にひたすら憧れるユイ(橋本愛)に言う場面。震災後、東京から再び北三陸に戻り、ユイからなぜ戻ってきたのかを聞かれて、「決まってるべ、ユイちゃんに、ここが一番いいところだ」と教えてくれたのだ」と言うのである。さて、吾輩の場合は、どうにゃんだかな……。

「で、タマさん、あとは何だべ?」

「吾輩がここに来る最大の理由は別にある」

「はあアキちゃんにここにいるからだべ」と、照れ隠しでワザとなままってみた。「タマさん、そ

のエセなまりはねえべ。田舎をバカにしてんのか!」と急に怒り出した。

「あ、いやー……」好意を示すはずのことばが、下手な照れ隠しでまたなくなった……かと思つたところ「まったく冗談だ。オラも素直じゃねえな。タマさんにそんなこと言つてもらつて嬉しいべ」と、くりくりした目で吾輩を正面から見る。「アキちゃん……」

ガチャッとカフェのドアが開いて、坊主頭が出てきた。「なんだタマ、待つたのか?」スツとアキちゃんが身構える。「アキちゃん、大丈夫だよ」と声をかける吾輩。

坊主頭はアキちゃんを見て、「ああ、例の友達だな、ふむ」と言うなり、三分くらい立ち止まって考え込んでいる。

坊主頭は吾輩のもとへやつてきかかみ、吾輩の額をコチヨコチヨしながら、「タマ、明日の朝、そのこの駐車場に迎えに来るからな。いいか朝いなかつたら、多摩に帰れないからな、絶対戻れよ。お前が戻らなかつたら『タマの風』も終わっちゃうからな」と言つて、一人車に乗つて、宿へ向かつてしまった。

(続く)



◆財政研究会



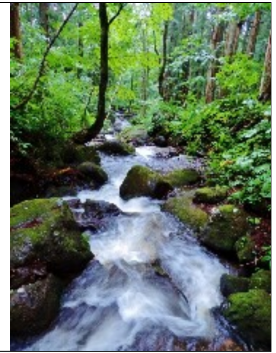
「地方創生～奥多摩町～」

2016年2月6日(土)

14:00～

多摩研事務局にて

報告者：師岡伸公(奥多摩町議員)



流れました。何度か記事に名前を出
させて頂いたものの、きちんとした
ご挨拶は紙面の都合でしておらず、
申し訳ありません。編集作業と並行
しまして、緑の風がどうやったらW
EBで見やすくなるかをまだまだ先
ではあります。鋭意企画中です。
あらためまして、これからもよろし
くお願い致します。

(編集部 松川 遥)

ひとこと
ふたこと
編集日誌

六月末から多
摩研事務局で
お世話になり
半年の月日が
緑があり、

多摩住民自治研究所
11月の活動

- ・ 2日(月)教育座談会
- ・ 8日(日). 9日(月) Excel講座歳入編
- ・ 13日(金)事務局会議
- ・ 16日(金)緑の風編集委員会
- ・ 21日(土)組織財政会議
- ・ 27日(金)ステップアップ&Excel講座発送
- ・ 28日(土)財政研究会 事業企画会議
- ・ 30日(月)緑の風印刷帳合発送

誠に勝手ながら、多摩住民自治研究所は、2015年12月29日から2016年1月4日まで、年末年始休業を頂きます。ご迷惑をおかけしまして、申し訳ありません。

各講座受講受付中!

・よく分かる市町村財政分析基礎講座

- ◇講師 大和田一紘 石山 雄貴
- ◇期日 2016年1月26日(火), 27日(水)
- ◇時間 1日目 午後1時～午後7時30分、2日目 午前9時15分～午後3時
- ◇会場 たましんRISURUホール (TEL 042-526-1311)
- * JR中央線・立川駅南口徒歩13分。東京駅～立川駅は中央特快39分、快速56分
- ◇受講料 24,150円 (割引あり、消費税込)

・第24回 議員の学校

世界と日本の情勢をつかみ、自治体・議会の役割を学び合う
～どうする?どうなる!地域と住民の暮らし～

- ◇講師 中嶋信 森裕之 橋本輝夫 神田敏史 石川満 池上洋通
- ◇期日 2016年2月12日(金), 13日(土)
- ◇時間 1日目午後13時～午後6時15分(その後食事・交流会)
2日目午前9時15分～午後3時40分
- ◇会場 たましんRISURUホール (TEL 042-526-1311)
- * JR中央線・立川駅南口徒歩13分。東京駅～立川駅は中央特快39分、快速56分
- ◇受講料 28,000円 (割引あり、消費税込)